一般口演

1　明治初期の啓蒙医家 森鼻宗次

中山　沃

森鼻宗次（一八四八年出生）の父は摂津国有馬郡藍本村（現・三田市）の医師森鼻嘉門（純三郎、適塾門下生）、祖父永有は三田藩藩医。宗次は大坂の緒方郁蔵の独笑軒塾に入門し蘭方を学んだ。独笑軒の門生姓名録によれば、総門下生八四名の五九番目に盛鼻縫之助の名が記されている（入門年月は不記）。

明治元年、幕府の開成所教授であった川本幸民が三田に帰って蘭英学塾を開いた時、帰郷し入門した（二一歳）。幸民の入門姓名録には五番目に盛華縫殿助の名前で記載。ここで英学を研鑽し、後年多くの米国医書を翻訳する実力の基礎を修得したと考えられる。

幸民の塾が明治三年七月に閉鎖されたので、八月再び大阪に出て、大阪医学校病院の授読生試補（月給三両）となり、次いで授講生・副当直医・薬局長となった。当時、かっての師緒方郁蔵は明治二年一一月大学少博士に任ぜられ、大阪医学校病院で明治四年（一八七一）七月七日に没するまで医書の翻訳・編集を行っていた。宗次は業務の傍ら、郁蔵の翻訳に協力しながら英語力をつけていったと考えられる。

明治六年に「皮下注射要略」を翻訳出版し、日本で最初に皮下注射法を紹介した。続いて同年「薬剤摘要」「薬剤新書」、明治七年に「検脈新法」、同年から九年にかけて「独逸氏外科新説」十冊（出版予告によれば三〇冊で、途中で中断したと思われる）。明治十年に「堺県医学校講筵筆記内科新説」二冊、「内科全書」三冊、「虎列刺治範」を出版した。いずれも英米医書を翻訳し、纂輯したものである。その他、「華氏日用新方」「日用薬剤分量考」「哥絡氏外科新論」「内科新選」の出版願が出されている（演者は未見）。「皮下注射要略」は英国の医師 Alexander Wood（一八一七―八四）が一八五三年（森鼻訳本では一八五五）

モルヒネを皮下注射したのが世界で最初であること、その作用機転（局所性でなく、全身性であること）・功用の利害・適用の疾患・皮下注射の方法（注射器を図示）・注射する薬物の種類などについて概説している。翻訳の参考にした医書はウッド及びスチールの薬論とハルツホルンの治療書などであった。

明治七年（一八七四）六月、堺県は妙国寺内に仮医学校を設立し、森鼻が校長に任命され、翌八年、堺東材木町に医学校舎を新築、それに病院を併設、森鼻は病院長（月給七〇円）を兼任した。

明治一二年（一八七九）秋、森鼻病院長執刀のもとに、堺の刑務所で、堺で最初の病理解剖が行われた。遺体は水腫病の一四歳の少年の囚人で、開業医や医学生が見学した。

明治一四年（一八八〇）堺医事協同社を組織し、社員の親睦、医学の知識の向上に寄与した。しかし、この年の一〇月堺県医学校は廃止され森鼻は大阪府立病院に出仕した（堺県が廃され、大阪府に吸収されたのは翌年の明治一四年二月）。次いで森鼻は府病院の司療医、教諭となり、明治一五年三月、駆梶院長となる。同年五月には府医学校二等教諭となり、主として眼科学を教授した。しかし、明治一六年（一八八三）五月、森鼻（三六歳、府立病院医員・駆梶院長・警察病院長・医学校教諭）は知事の内命により府立大阪病院奈良分院長を命ぜられたが、「公の事は公然と命ぜらるべきである」と抵抗して、辞職し、大阪市東区高麗橋四丁目で全科を標榜して開業した。これは旧医員を東大卒の医学士に交代させようとした府当局の意図によるものであろう。

明治初期に、大学の正規の英米語の教育を受けていない一地方の医師が、これだけ多くの英米医書を翻訳し出版したことは、驚嘆すべきことであり、医学知識啓蒙に尽くした功績は顕著である。

大正七年一月二七日死去、享年七一歳、祖父・父と同じ墓（大阪市の阿倍野の市営南霊園）に葬られる。子孫は神戸市に在住。

（吉備洋学資料研究会）